

# 沖島南におけるセタシジミ稚貝十字放流の効果

井戸本純一

## 1. 目的

新たな資源保護の取り組みがなされている沖島南漁場におけるセタシジミ種苗の放流効果を把握するため、2年前から0.3mm 稚貝を放流している水域でシジミの密度を調査した。

## 2. 方法

200m×200m の十字状に放流ラインを設定し、2020年8月に1262万個を手動操船で、2021年6月～7月に1288万個を自動操船で線上に放流した<sup>1)</sup>。2022年8月に放流ラインを含む8方向の放射線状に採取幅8cmの小型定量桁網(目開き10mm)を約100m曳航し、未成熟貝～成貝の方位別生息密度を調べた(図1)。また、近接する親貝放流区内でも生息密度を調査し、殻長組成を比較した。

## 3. 結果

稚貝放流水域および親貝放流区内におけるシジミの殻長組成を階級別の平均生息密度として図2に示した。親貝放流区内では殻長22mm前後と10mm以下の密度が相対的に高かったのに対して、稚貝放流水域では殻長10～18mmの個体が全体の79%を占め、それぞれ起源が異なる個体の影響がうかがわれた。

稚貝放流水域における方位別の生息密度を殻長階級ごとに図3に示した。殻長20mm以上の個体のほとんどが北西～北東方向に分布していたのに対して、殻長8～14mmの個体は北および南東方向に多く、西および南方向では少なかった。

調査時に殻長8mm以上に達していた可能性のある2020年の放流稚貝は、手動操船のためうまく線上に放流できず<sup>1)</sup>、東および南の放流分が南東寄りに放流されていた。小型貝の分布はこの放流状況を反映している可能性があるが、放流した西方向で少なく、放流して

いない北東方向でも比較的多いことから、分散や移動が相当あることがうかがわれた。

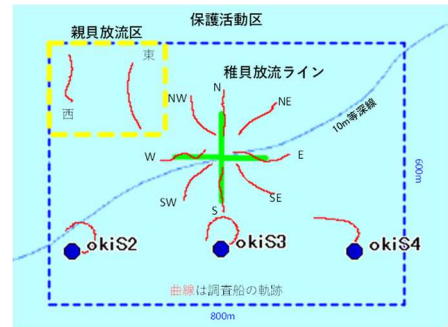


図1 沖島南の稚貝放流水域における小型定量桁網調査地点(●は別途の貝桁網調査定点を示す)

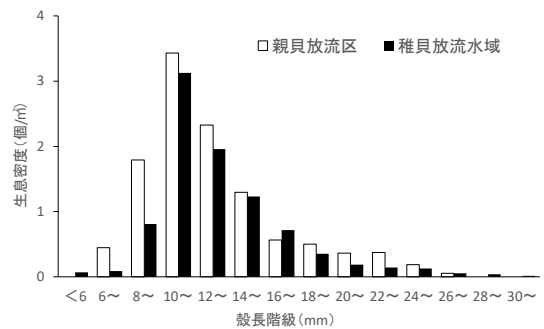


図2 稚貝放流水域および親貝放流区内におけるシジミの殻長階級別生息密度

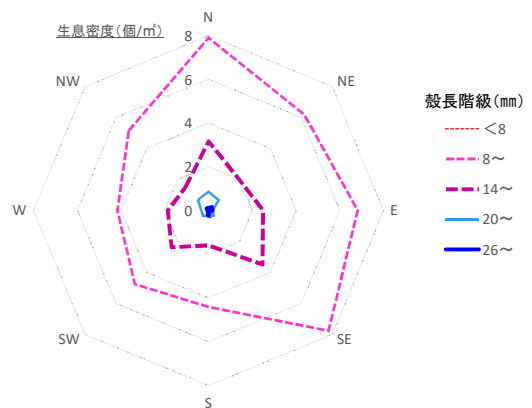


図3 稚貝放流水域におけるシジミの殻長階級別の方位別生息密度

1) GPS搭載の電動船外機を用いたセタシジミ稚貝の精密放流. 令和3年度滋賀県水産試験場事業報告. p53